

〔研究ノート〕

## 滋賀県湖南・甲賀地方の在日コリアン

仲尾 宏

### 論文要旨

滋賀県の湖南・甲賀地方は野洲川の流域と信楽の高原地域からなる山間地域である。この地域には戦前から朝鮮半島出身者が土木工事現場で働き、第二次大戦末期には大阪・兵庫地域から空襲を逃れるために移住して農作業で生計を建てる人も増えた。彼らは戦後は貧困と差別のまなざしのなかで、過酷な労働に耐え、厳しい生活を過ごしてきた。本論では彼らの歩んできた道や生活実態を知るために、人口統計やわずかの資料をまとめ、また4人の在日2世からの「聞き取り」調査を行った。過去の在日コリアンが日本各地で過ごしてきた歴史がよくわからないまま、忘却されつつある今、少しでもその足跡を記録しようとして、この研究と調査をまとめた。統計表やその他の資料は数少ない先行研究者の研究成果を利用して頂いたものが少なくないことを記して、お礼にかえさせていただく。

### はじめに

滋賀県は京都府に隣接している地域で、近代以降は京阪神地域の後背地として農業生産を主としながら、部分的に工場が出来、また京都などには労働力を提供してきた。

滋賀県に在日コリアンの足跡が最初に記されるのは一九一〇年前後の宇治川発電所の水路トンネル工事現場（大津市南部）だと推定されるが、そのあとは一九四五年の敗戦まで各地域ごとに労働の現場を求めて朝鮮半島より渡航してきた人の姿がみられるようになる。湖北では土倉鉾山

(旧木之本町、現在は長浜市)での銅や硫化鉍の採掘と運搬現場、湖東では石灰採掘やセメント工場、琵琶湖の干拓、醬油工場など、湖西では朽木(朽木村、現在は高島市)のマンガン鉱、大津市域では紡績関係の工場勤務、旧日本軍事基地の造成や基地関連の仕事などに従事していたことが部分的に判明している。これらの在日の人びとの動静については、いわゆる「強制労働」との関連を含めた調査と研究が地元での研究にたずさわる人々の手によって部分的に発掘されているが、その全容を解明するには到っていない<sup>1)</sup>。

本論の対象地域である湖南・甲賀地域については対象地域が広大なこともあって、まだほとんどその実態が判明していない。だが、統計数字から見ると、後述のように、山間部でありながら、在日の人口は少なくないこと、農業従事者がいたこと、しかし地域での部落解放運動や融和政策事業の中で在日はまったく登場せず、現代の地域の人権問題活動家も知ることがすくない、ということも指摘できる。

そこで、今回は先行研究や調査、そして人口統計などに学びながら、数名の在日コリアンからの「聞き取り調査」と現地調査によって、この地域の在日史の一端を彰かにすることとした。

## 一、戦前の湖南・甲賀地域の朝鮮人の推移

現湖南市(旧甲賀郡石部・甲西・三雲町)の地域は殆どが平野部であり、近代以降、かなり早い時期から国道一号線や旧国鉄草津線が通り、また野洲川やその支流の杣川の流域でもあって、古くからの街道筋の宿場などを含めて人口は少なくなく、農業生産地域として発展、また大津・京都への通勤・通学も可能な地域であった。戦前の在日コリアンの動向を記す最初の統計(表1)では一九二〇年にその人口は記されていないが、一九三〇年には旧石部町の一二名をはじめ、若干の人数をかぞえることができる。おそらくは旧石部町とその周辺の採石、採土などの現場で働いていた人びとであろう。そして男性に比較すると女性の数が圧倒的に少ないことも、彼らが重労働の現場単身労働者であったことが推測される。

これに対して、残余の各町村は野洲川の上流の山間地と信楽高原の標高の高い地域であり、農業の適地は少ない。ここでは旧南北杣村の合計で一八二名、その他の貴生川、雲井、長野、朝宮、小原の諸村と合わせると二二五名である。これは一九二九年にはじまった旧国鉄信楽線(現信楽高原鉄道)の工事現場が中心であったと思われる。それを裏付ける記事がある。

(表 1) 戦前の滋賀県の朝鮮人人口の推移 (1)

市町村	1920 (大正 9) 年			1930 (昭和 5) 年			
	総数	男	女	総数	男	女	
大津市	0	0	0	182	133	49	
滋賀郡	30	26	4	697	388	309	
粟太郡	1	1	0	161	124	37	
野洲郡	0	0	0	92	62	30	
甲賀郡	石部町	0	0	0	122	82	40
	三雲村	0	0	0	5	4	1
	岩根村	0	0	0	10	8	2
	伴谷村	0	0	0	1	1	0
	柏木村	0	0	0	43	38	5
	水口村	0	0	0	45	29	16
	佐山村	0	0	0	1	1	0
	土山村	0	0	0	81	65	16
	鮎河村	0	0	0	2	2	0
	大原村	0	0	0	1	1	0
	寺庄村	0	0	0	3	3	0
	貴生川村	0	0	0	1	1	0
	北杣村	0	0	0	148	119	29
	南杣村	0	0	0	34	27	7
	雲井村	0	0	0	9	1	1
	長野村	0	0	0	11	6	5
朝宮村	0	0	0	15	13	2	
小原村	0	0	0	7	4	3	
小計	0	0	0	539	405	127	
蒲生郡	4	4	0	161	113	48	
神崎郡	12	8	4	225	142	83	
愛知郡	0	0	0	30	28	2	
犬上郡	13	13	0	315	221	94	
阪田郡	6	6	0	672	499	173	
東浅井郡	1	1	0	107	60	47	
伊香郡	1	1	0	28	23	5	
高島郡	38	38	0	483	381	102	
合計	106	98	8	3692	2579	1106	

※阪田郡入江村は1923年11月15日に米原町に編入。現在の坂田郡は当時、阪田郡と表記。雲井村が男女合計数が一致しないため全体合計にも誤差が生じるが原資料のままとした。出典)内閣統計局『国勢調査報告』(大正9・昭和5年版)

その一期工事は貴生川・長野間一五キロだが、これをさらに二工区に分ち第一工区を貴生川から北杣村・峠間、第二工区を峠・長野間とし、今工事を急いでいるのは第一工区だけの七キロ一〇〇の土木新設工事である。この工事は昨年五月一五日川四十四万円の予算の予算で始められ、工事事務所を北杣村牛飼に設け、殺人的暑熱を冒して請負の東海鋳業株式会社に属する約二百名の日鮮土工が北杣の名のない付近の丘から土を掘り出し、蒸気機関車のトロッコでせっせと土盛工事に励んでいる。(傍点は論者)

また時は少し前に遡るが、大津職業紹介主任の談話記事がある。

(前略) 鮮人求職者の増加はこの紹介所として実に珍しい事でその多くは単独□□□□は少なく大抵二三人連れて、□□□□者も間間あります

が一般に内地渡航後間もないと見えて内地語を解する者の少ないのは全く閉口です。もとより少々でも内地語の判る者には極力紹介の労をとっていますが、元来保守的思想の濃厚な当地には未だ差別的觀念が去りませんので、就職後も主人や同輩の侮蔑的態度を快からず思つて間もなく飛び出すといふのが多いので是等は特に使用者側の注意すべき点で、或はこの現象が一時的傾向であるにしても、願くばこの際、官公衛銀行会社等が率先して彼等の為に陋習を打開して生活の安定を図つて戴きたいものです。<sup>3)</sup>

上記の二つの資料のうち、前者は従事した工事の内容が具体的に明らかであるが、後者の場合、朝鮮人求職者が大津の職業紹介者を訪れて求職活動をたびたび行つており、渡航間もないか、他の現場の工事が終了し、引き続き従来就職現場に近いところでの就職を求めていたことが推察される。

また農業、もしくは農業周辺の業務従事者の存在を裏付ける資料はいまだ見当たらないが、一九三〇年代には、大阪府の堺市周辺や九州各地などで小作に従事していた朝鮮人も存在した、といわれている。なお、滋賀県ではそのような事例は発見できていない。

戦前の朝鮮人人口を示すもう一つの統計は協和会の会員数である。在日朝鮮人の統制と「皇民化」政策遂行のために一九三六年に「協和事業実施要旨」が全都道府県に到達され、一九三九年に全国協和会が設立された。滋賀県でも一九三九年一月に県庁兵事厚生課内に滋賀県協和会の事務所が置かれ、会員を県内各地に募つた結果、一九四三年にはほぼ一〇〇%の会員・準会員数を数えた。<sup>4)</sup>

それによると、この地域では水口支会が八四〇名(在住人口八四三名)、信楽支会が五九一名(在住人口五九一名)となり、両支会を合わせると大津市(当時の市域)に次いで、大人数を擁するに到っている。先の一九三〇年の数値と比べると、一八〇%近い数値となり、この期間での流入朝鮮人がいかに多かつたかを示している。

なお、稲継靖之氏の作成になる滋賀県の朝鮮人人口の総数と職業別人口は(表2)〜(表4)の各表が示す通りである。総数の伸びは一九四〇年代に入ると、毎年一五〇〇人程度の増加であり、特に一九四四年度から一九四五年度の一年間には八五〇〇人、率にして六二%の増加率である(一九四三年度は統計数値の根拠が明確でないので評価できない)。

今回の聞き取り調査の対象とした人びとは、この時期に日本の他の大都市から移住してきた人びとであり、戦争激化と米軍の空襲被害を避けるために、未だ農山村が多かつた滋賀県に「疎開」してきたことが語られ、この急激な人口増加の要因の事実を裏付けるものであった。

(表 2) 戦前の滋賀県の朝鮮人人口の推移 (2)

年	総数	男	女	備考	出典
1907	2			12 月末現在	『滋賀県統計全書』学生 2 名
1908	2			〃	〃
1913	8			〃	内務省警保局「大正九年六月三十日朝鮮人概況其三」
1914	9			〃	〃
1915	30			〃	朝鮮総督府『朝鮮の人口現象』(1927)
1916	95			〃	〃
1917	39			〃	〃
1918	62			〃	〃
1919	27			〃	〃
1920	106	102	4	6 月末現在	「朝鮮人概況其三」
	138			12 月末現在	『朝鮮の人口現象』
1921	217	201	16	6 月末現在	内務省警保局「大正十年一月、朝鮮人近況概要」
	138			12 月末現在	『朝鮮の人口現象』
1922	523			〃	〃
1923	753			〃	〃
1924	832			〃	〃
1925	1071	852	219	6 月末現在	内務省警保局「大正十四年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」
	1091			12 月末現在	『朝鮮の人口現象』
1926	2176	1846	330	〃	内務省警保局「大正十五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」
1927	1285	1006	279	〃	内務省警保局『社会運動の状況』
1928	2516	1925	591	〃	〃
1929	2391	1798	593	6 月末現在	〃
	3008			12 月末現在	〃
1930	2871	2114	757	6 月末現在	〃
1931	3128	2150	978	12 月末現在	〃
1932	4021	2688	1333	〃	〃
1933	4835	3045	1790	〃	〃
1934	5163	3225	1938	〃	〃
1935	5759	3508	2251	〃	〃
1936	6172	3609	2563	〃	〃
1937	5712	3330	2382	〃	〃
1938	6263	3548	2715	〃	〃
1939	6659	3854	2805	〃	〃
1940	7792	4503	3289	〃	〃
1941	9465	5439	4025	〃	〃
1942	11130	6226	4904	〃	〃
1943	11173			〃	坪江汕二『在日本朝鮮人概況』(1965)
1944	12783			〃	〃
1945	20456	12722	7734	11 月 1 日現在	内閣統計局『昭和二十年人口調査』

(表3) 内務省警保局による内地在留朝鮮人職業別調 (1) (1938年以前)

年次	1915	1917	1920	1921	1925	1926	1929	1930	1931	1932	1933
牧師・僧侶										1	3
事務員					3	3					
学生							12	16	15	12	16
農業					83	70	88	42			
商業		8	1	1	1	1		23	23	33	66
労働者	交通運輸就労者			1	3	6	12		8	12	20
	職工			26	38	355	278	406	412	525	542
	鉱坑夫			37	27						
	雇人	1	1		29	28	58	115	89	135	124
	自由労働者	29	30	41	117	513	1658	1309	1639	1414	1938
	芸娼妓及酌婦									1	
	小計	30	31	105	214	874	2006	1830	2148	2077	2624
其他											
無職											
合計	30	39	106	217	1071	2176	2391	2871	3128	4021	4835
備考	12月末	12月末	6月末	6月末	6月末	6月末	6月末	6月末	12月末	12月末	12月末

備考：職業別分類は『社会運動の状況』1931年版以降のものによった。なお、それ以前の統計における「労働」「土方」「土方」「各種人夫」「日稼」については「自由労働者」に編入した。

出典：1915年は「昭和五年六月三十日、朝鮮人概況」、1917年は「大正七年五月三十一日調、朝鮮人概況第二」、1920年は「大正九年六月三十日、朝鮮人概況第三」、1922年は「大正十一年一月、朝鮮人近況概要」、1925年は「大正十四年十二月、大正十四年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」、1926年は「大正十五年十二月、大正十五年中ニ於ケル在留朝鮮人ノ状況」、1929年以降は『社会運動の状況』による。

(表4) 内務省警保局による内地在留朝鮮人職業別調 (2) (1934～42、各年12月末日現在)

年次	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942
有識的職業	4	4	6	9	6	6	8	9	16
商業	184	208	341	339	436	479	557	355	377
農業	32	69	60	43	44	83	51	66	105
漁業			11	1	2	2	2	2	3
労働者	鉱業	10	81	86	49	68	128	184	255
	繊維工業	403	545	509	420	276	449	540	601
	金属機械工業	22	30	25	36	39	52	29	49
	化学工業	165	42	95	42	45	52	91	79
	電気工業		10	2					
	出版工業	1	1	2	1	1		1	1
	食料品製造業		4	4	58	57	4	3	3
	土木建築業	1426	1196	1046	894	1132	1274	1347	1507
	通信交通運輸業	49	109	101	68	49	53	75	81
	仲仕業	45	116	34	20	23	42	34	45
	一般使用人	228	375	222	166	177	177	207	206
	其他労働者	398	684	507	400	348	102	570	672
	小計	2747	3193	2633	2154	2215	2333	3081	3499
接客業者	45	49	45	32	24	26	22	23	
其他有業者	103	68	53	129	51	89	196	212	
学生・生徒	24	32	31	57	49	132	76	67	
小学・児童	354	396	504	579	795	399	1021	1507	
在監者	50	57	7	34		2	7		
無職	1620	1683	2481	2335	2641	3108	2771	3725	
合計	3163	5759	6172	5712	6263	6659	7792	9465	

出典)『社会運動の状況』各年版による。

さらに(表4)をみると、一九四〇年代以降、農業、鉱業、土木建築業、学生・生徒、無職が伸びていることがわかる。これはやはり日本国内各地から家族ぐるみで移動してきた人びとと、その人びととりあえずついた仕事であっただろうことが推測され、また学齢期に達した二世の子どもは、ともかく日本の学校へ入学させることになったようである。

一九四三年八月になると従来の志願兵のみによる朝鮮人兵士が不足となり、朝鮮人を徴兵対象とする兵役法に改正されて、一九四四年、四五年に朝鮮半島で徴兵検査が実施された。そして戸籍の確認、日本語習得能力、「皇民化」浸透度などを確認したうえで、成績良好者を甲種合格とした。これとは別に各軍管区に自活隊として一万名を配置することとした。この自活隊とは「本土非常決戦措置要綱」の「最終戦争指導会議報告九号」により「特攻用飛行機・船艇用液体燃料」を甘薯・松根・桑の木皮などから生産することを各駐屯地に命じた者たちの名称であった。また別に「農耕勤務隊」として、主として中部・関東軍管区に甘薯などの食糧自給をめざす要員が配備された。この兵士たちは兵士でありながら、武器払底のため武器は携行せず、「赤ベタの肩章」と軍服、銃とスコップを持った奇妙な兵隊として語られている<sup>5)</sup>。滋賀県内にも若干の配置がなされたが、湖南・甲賀地域ではその痕跡はなさそうである。先の職業別統計で減少している職業は、機械金属・化学・通信運輸工業・仲仕などであり、恐らくは軍需工場などへの転職、そして一般使用人、その他労働者であるが、これも「非常時下」の労働現場の推移と実情を反映しているものであろう。

次に戦争末期の朝鮮人人口と敗戦直後の人口動態を市郡別に分析してみると、(表5)のような結果が得られた。一九四三年三月の人口は先の協和会の会員統計にある朝鮮人住者の数であり、一九四五年一月の人口は内閣統計局の調査によるものである(協和会支会の管轄区域と四五年の市郡の管轄が異なっていないと見られる地域、及び甲賀郡の近接

(表5) 一九四三年の朝鮮人および一九四五年の朝鮮人・台湾人人口比較

市郡または協和会 支会別	一九四三年三月			一九四五年一月		
	男	女	計	男	女	計
大津	四三六	一二五五	二六九一	一三五三	七七八	二〇八一
滋賀(堅田)	三五四	三〇〇	六五四	七〇一	四七〇	一一七一
長浜	六一一	三二二	九三三	三〇九	二九三	五五二
彦根	二八四	二九八	五八二	四一三	二五〇	六六三
甲賀(水口・信楽)	四八二	三六六	八九三	一八八六	一八五〇	三二三六
蒲生(八幡・日野)	五一六	二八八	五八二	二二四〇	八七九	三一一九
野洲	四〇七	三三八	七四五	八三六	五九六	一四三二
合計(含む他地域)	五八〇三	四五四七	一〇三五〇	一二七二二	七七三四	二〇四五六

※一九四三年の数字は協和会事業機構調べ。内務省警保局保安課『協和事業関係』。一九四五年の数字は内閣統計局調査。総務省統計局図書館マイクロフィルム。以上の二つの統計から作成した。なお一九四五年の人口には在日台湾出身者も含まれている。( )内の地域名は協和会の支会名でその管轄郡区と行政上の郡とは同一である。



地域などに絞って比較してみた。後者は国による調査とはいえ、敗戦直後の混乱期で、その正確さには疑問点も多々あると考えられる。

まず上記の（表5）は注で断ったように、在日台湾人も含まれているので、厳密には比較できる表ではない。しかし、滋賀県は戦争中も戦後も台湾出身者の集住した地域もなく、また戦中・戦後に日本の他地域から多数が移住してきた痕跡もない。だとすれば、この比較は在日朝鮮人が当時おかれていた社会状況を中心に考えて差し支えないとしたい。

四五年八月から一〇月にかけて朝鮮人の自主的帰国は始まっていた。その時期は帰国に便利な都市ほど早い傾向があった、とすれば、大津や彦根での人口減にそれが反映しているのかもしれない。もう一方で、戦中の「疎開」は一九四五年三月の東京・大阪・神戸・阪神間・名古屋などの猛烈な米軍空爆による被害がそれらの大都市にいた朝鮮人の農村地域への移住として現象したことがある。それでもできるだけ空爆被害と縁が薄く、不便でも、食糧が自給できる農山村への移住となったことであろう。大都市に居住していても、日本人と違って頼れる親族もなく、その土地に愛着があったわけでもない、大多数の朝鮮人がわずかの縁や情報にすがって、滋賀県の農山村地域にやって来たことであろう。それが湖南・甲賀をはじめ、高島、蒲生、野洲、滋賀などの各郡への移住、即ち人口増加の大きな要因であったとみられる。敗戦、そして解放による帰国のチャンスはまだ不透明であってみれば、ここしばらくは新しい移住地で過ごすことを余儀なくされていた時期の人口増であったと考えられる。

### 三、戦後の甲賀地域（湖南・甲賀市域）の在日コリアン

戦後の甲賀地域の在日コリアンの物語は次の章の書き書きに譲るとして、この地域は水利に恵まれた地域で農作物の育成に適地であったことのほかに、東南部は鈴鹿山系に連なり、野洲川やその支流の柚川が、ほぼ中央部を貫流して、豊かな水を供給している。そのため戦中からこの地域の上流でのダム建設が建設され、戦後、それが本格的に実施に移されたため、大規模な造成工事がはじまった。大原ダム、青土ダム、野洲川ダムなどがそれである。そこにも朝鮮人の姿があった。また戦後の燃料払底時期には亜炭の生産が奨励され、この地域にも数多くの亜炭やマンガン鉱山が開発された。それらの鉱山を一覧表にすると、次のようである（表6）。

これらの鉱山の多くは零細で従業員一〇〜三〇名程度の個人経営であり、労働条件は過酷であったとみてよい。また開業は戦中からのものが



少なくないと思われる。なぜなら亜炭も一般家庭用だけでなく、工業用としても必需品であったし、マンガンもまた汎用しうる貴重な鉱物資源として武器生産にも不可欠な物資であったからである。このうち、④、⑤などはおそらく朝鮮人の経営するものであっただろう。過酷な条件をいとわず、そのような現場に朝鮮人が多く働いていたことは、京都府内丹波地域の諸鉱山や滋賀県の高島市の朽木地域でも確認されている。

この地域の戦後の全体像を知るために、その概要をAさん（元朝鮮総聯滋賀県本部の甲賀地区担当常任委員）からうかがったことを、まずここに要約する。

この地域には知人からの伝聞や知り合いを頼って戦中の大阪、広島、山口などから疎開（移住）して来た人が多かった。三雲のAさん（聞き取り者のAさんとは別人）は九州から来た人で、現在も鉄工所を営んでいる。石部にはバラック建ての五軒長屋と言われる地域があった。多くは土建業、亜炭鉱山にも従事していた。「強制動員」対象者かどうかはわからない。ダム建設労働者はダム完成後、近くに移住した。農業従事者（多分兼業）もたしかにいた。農業者や土建業者の場合、行政当局とのトラブルには総聯として仲裁に入ったこともある。バラック建築の場合も仲立ちをした。水口には少なくとも、一二〜三軒の朝鮮人集落があった。農業の人は六五〜六九年頃までは続けていた。鉱山・土建の人は七〇年代前半までに殆ど「帰国」した。そのあと飲食店をする人も増えた。やがて、ダンブを買って自前の仕事をする人が増えた。一九八〇年、三雲の国道沿いに朝銀の支店ができた。家の新改築、ダンブの購入、その他の仕事の開業資金、また飲食店の開業のための資金需要が旺盛にあった。ダンブはきつい仕事だが、結構儲けた人もいたようだ。三雲と信楽に朝鮮学校があった。一九四八年に閉鎖命令が出て、また一九四九年には団体等規正令によって朝連が解散された時に閉鎖された。三雲は夜間学校だった。その後、日本の学校に民族学級ができた。のちに膳所に朝鮮学校ができた折には三雲から六〇〜七〇人の児童・生徒が通学した。送迎バスが出たことがあり、京都の朝鮮学校へ行った子もいた。総聯滋賀支部は五〇年代にはできていたので、いろんなこ

(表6) 甲賀地域の鉱山群

鉱山名	所在地(旧村名)	採鉱種別	従業員数	経営者名
①信楽	信楽町西	亜炭	五八	前川良一
②貴生川	貴生川村牛飼	〃	二九	貴生川炭鉱(株)
③猪口	三雲村三雲	〃	二一	猪口武雄
④三甲	三雲村三雲	〃	二一	金原好郎
⑤小原	小原村	〃	一六	国本太郎
⑥東洋	鮎川村大河原	〃	七〇	東亜細産業(有)
⑦飯道寺	雲井村宮町	〃	一二	根本芳治
⑧谷村	貴生川村三大寺	〃	一〇	谷村村八左衛門
⑨杉谷	甲南町	〃	一三	安達万寿造
⑩弥栄	鮎河村	マンガン	四五	弥栄鉱業(株)
⑪小野谷	貴生川村	〃	三六	岡本太郎

資料出所『滋賀年鑑』一九四八年版。同年六月調べ。

とができた。

日本の学校での民族学級は、行政からいろんな妨害があり、それと闘ってきたこともあった。朝鮮学校へ行った子も増え、結局、民族学級はなくなったが、その閉鎖を惜しむ声もあがっていた。

以上が、湖南・甲賀地域をとりまく風土と歴史の概要である。個別の具体的な生活の実像は以下の三人の聞き書きによって、ある程度復元することができる。

#### 四、湖南・甲賀で暮らした在日コリアン

□聞き書き・Bさん（在日二世・女性）

○父の故郷は慶尚南道の金海の近く。渡日して大阪に住んでいたが、戦争中に空襲を逃れるために自主疎開して三雲に来た。私は一九三九年の生まれで、学校に上がったのは終戦の翌年の一九四六年のこと。小学校では日本人の子と机をならべた。午後は民族学級で二年生ごとのクラスで、別棟の教室で受けた。それで朝鮮人だということがすぐわかるのでいじめを受けたことがあった。仕返しは大量の小石を自転車に積んで苛めた子の家に投げつけた。差別をする先生の家にも石を投げて謝らせたこともあった。家では一旦は帰国を決意して家財道具も売り払ったが、なにかの事情であきらめ、また三雲にもどった。母は十二歳のときから大津紡績で働いていた、と言っていた。韓国籍は旅券が欲しかったので、協定永住制度ができた時（一九六五年）に取った。

○三雲の家は草津線の線路と川原（柚川）の間の狭い土地に流木・倒木などを拾ってきて建てた。父母の苦労は大変。水道は四年前（二〇〇九）にやっと引けた。それまでは井戸水。電気もなく、一九六〇年頃までランプの生活だった。電気を引くのに一軒あたり当時の金でも三〇万円払った。家の前は未舗装だったので、ほこりだらけ。その舗装を役場にいうとまた三〇万円とられた。土地の地目は今でも山林、そして一代限り、という約束で借地料も払っているので立ち退きを逃れている。うちの近所は皆そうだ。家はその後、建て替えた。

○ここに来たときは徴兵で働き手がいなくなり、田畑が荒れるので地主が朝鮮人でも小作をさせてくれた。皆疎開してきた人達で一四〜一五軒

はいた。私の家では祖父が耕作の中心だったが、自家用の田は三反で、あと五反も借りて、他の朝鮮人に小作の又貸しをした。男五人と女二人で米と麦を八反七畝を耕した。田墾き、田植え、施肥、草取り、取り入れなどは近所の朝鮮人、時には日本人とも共同で作業した。牛も日本人の家から借りた。とにかく農機具がない時代だったから。休み時には茶、菓子、昼には飯、魚、漬物、キムチを持っていき、皆で田の畦で食べた。反当たり収量は六俵前後で家の飯米の分を除いて京都へヤミで持って行って売った。供出はした覚えがない。地主が一括してやっていたのか。京都へ売りに行く時は皆「担ぎ屋」で、公安警察の没収を逃れるため、駅の手前で列車が徐行するとき、窓から放り出して仲間に受け取らせた。京都ではその米を買い出しに来る朝鮮人もいた。ほかには川原の碎石の仕事、近くの鉄工所や材木屋勤め、山林の伐採、運送など何でもやった。私は組紐の仕事は好きで、それも請け負ってやった。

○一九五九年に結婚して子どもをもうけた。祖父母の方針で男の子は日本の学校へやり、女の子は大阪の朝鮮学校へやる家が多かった。私はどうしてか、日本の学校へ行った。「帰国運動」もあり、何軒かは「北」へ帰った。しばらくは音信があった。韓徳洙がひそかに隠れてきていた、という噂も聞いたことがある。一九六三年まで百姓をしていた。その後、夫はダンプの運転手となったが、一九七五年にダンプを自分で買って「ひとり親方」になった。月に当時の金で三十万円は稼げた。私も免許をとってダンプに乗った。夫の死後もしばらくはダンプの仕事を続けた。とにかく仕事はなんでもした。

○近所とのかかわりは、買い物は三雲の駅前の八百屋では「通い」(通帳)で買って、まとめて支払った。毎日払う「日銭」がないから。他の朝鮮人もそうだったが、町内会には入らなかった。町内の祭りにも行ったことがない。町での仕事ができると川原の家から出て行く人も出てきた。もとの横田橋のところに渡し船があつて、水口の町へ行くときにはその渡しを利用した。三雲にも朝鮮学校があつたという記録があるそうだが、私にはその覚えがない。学校といつても小さな小屋掛けのようなものだったと思う。京都や草津には遠いけれども、三雲から離れて暮らすつもりはない(滋賀県内の朝鮮学校は表7・8を参照)。

(表 7) 1948 年 2 月現在における滋賀県内の朝鮮初等学校一覧表

学校名	教員数	生徒数	所在地
膳所初等	2	76	大津市膳所町錦大竹町
大津初等	1	63	大津市東浦垣内町
石山初等	1	58	大津市膳所粟津町東 1-20
滋賀初等	1	42	大津市滋賀里
別保初等	2	20	大津市膳所別保 349
藤尾初等	1	22	大津市藤尾町奥
牧初等	1	23	蒲生郡岡山村字牧岡山
安土初等	2	45	蒲生郡安土村下豊浦松原
八幡初等	1	28	蒲生郡八幡町出町通 6
彦根初等	1	45	彦根市安養寺町
高島初等	3	34	高島郡新儀村新庄
三雲初等			
醒井初等	1	34	坂田郡醒井村大字枝折
新儀初等			
今津初等			
米原初等			
信楽初等	3	31	甲賀郡信楽大字長野元町
能登川初等			
堅田初等			

備考：漢数字は算用数字に直した。明らかに誤字と思われるものは訂正した。空欄は元資料に記載がなかった。

出典：在日本朝鮮人連盟中央総本部「1948 年 2 月現在、全体組織統計表」（『在日朝鮮人関係資料修成<戦後編>』第 2 巻所収）

(表 8) 1949 年 5 月現在における滋賀県内の朝連小学校一覧表

学校名	所在地	生徒数	教員数
藤尾朝連小学校	大津市藤尾町奥藤尾	25	1
錦織朝連小学校	大津市錦織山上町	35	1
三雲朝連小学校	甲賀郡三雲村三雲	38	1
八日市朝連小学校	神崎郡八日市町	37	1
八幡朝連小学校	蒲生郡八幡町出町通 6 丁目	28	1
安土朝連小学校	蒲生郡安土村豊浦松原	28	1
鏡山朝連小学校	蒲生郡鏡山村八重谷	32	1
米原朝連小学校	坂田郡米原町大字南町	35	1
醒井朝連小学校	坂田郡醒井村大字枝折	23	1
膳所朝連小学校	大津市膳所錦北昭和町	145	3
旧大津朝連小学校	大津市金塚町	83	2
石山朝連小学校	大津市膳所粟津東 1 丁目	47	1
別保朝連小学校	大津市膳所別保町上保	24	1

備考：漢数字は算用数字に直した。明らかに誤字と思われるものは訂正した。

出典：李殷直「在日民族教育の夜明け：1945 年 10 月～48 年 10 月」（『高文研 2002 年巻末資料：1949 年 5 月の全国の民族学校の状況』より）

□聞き書き・Cさん（在日二世・男性）

○父母の故郷は慶尚南道の宜寧郡、釜山から高速道路で約一時間のところ。父は畑で働いていたところへ警官が日本への渡航を勧誘に来た。そして翌朝、家へ来て無理やり、荷物も持たせないで釜山へ。行き先は炭鉱だったが、その名も場所も告げられないまま、適当に分割させられて就労の現場へ。一九四一年頃だった、と聞かされた。あまりに仕事がつつく、怪我をした。それでそこを脱走して西宮の親戚を頼った。そこは土手沿いのバラックで、土方の仕事をした。一度帰国して、次は家族（妻と長女）と一緒に再度の渡日。一九四五年の空襲で被災して親戚を頼って滋賀県の石部へ。当初のバラックは浸水したので、山沿いの通称「五軒長屋」へ移転した。私は一九四二年生まれなので、戦前の記憶は乏しい。

石部には五軒長屋に一〇世帯、長石を採掘する灰山に一〇軒ほど、石部駅裏には六〜七軒ほどの同胞の住まいがあった。いずれも廃材・トタンを張り合わせた応急住宅で少しずつ人が住めるように改築を重ねた。私のいたところは「アパッチ部落」などと呼ばれていて、今も現存している。今、「ここに住んでいたんだよ」と言っていて、周りの子ども達をびっくりさせている。五軒長屋の奥には十軒くらい日本人の家があったが、彼らは私らの長屋を避けて通った。それほど地域の差別はひどかった。

○地域の同胞の仕事は土方、鉄屑集め、林野伐採、小作など。闇米売りは私はしたことがあるが、皆がしていたわけではない。その仕事のために日本人から苛められたことがあった。みじめだった。両親とは母語（朝鮮語）で会話。地域に夜間の民族学級があり、そこで朝鮮語を習ったので、ハングルを読めるようになった。朝連の学校もあり、当初は部屋借りだったが、後には集会所ができたので、そこを利用した。ここで学んだ人で帰国した人も多い。

○父親は威厳と決断力がある人で、七年前に死去したが、無年金だった。「人間として扱ってもらいたい」といつも語り、子ども達に厳しかった。それで良かった、と今も思う。周りの日本の子からは「ニンニク、臭い、チョーセン」とからかわれ続けた。長い間、地域の日本人は寄りつきもせず、避けられて吉彦神社の祭祀にも呼んでもらえなかった。ケガレという差別意識だったのだろう。今頃では寄付金はとりにくる。長屋に作ったオンドルバンで川から取ってきた台湾ドジョウや鶏肉を皆で食べたことが良い思い出。同胞は皆責任能力がある人で互助精神があり、泥棒にあうこともなく、家には鍵もかけていなかった。名前は本名で通した。これは父の方針だった。

○六十年代以降、スクラップ集め、塗金業、運送、土木などで自営する人が増えたが、近年は不況で廃業した人が七割、皆勤め人になった。工業団地が近くにできたが、そこで働いている人は少ない。韓国からのニューカマーの女性は飲食業をしている人が多い。在日や日本人と結婚して子どもをたくさん作っている。私は大学を卒業して、八幡小学校で数学と理科を講師として教えつつ、民族学級で在日の子を数人教えたことがあった。その時の子らはいきいきとしていた。この子たちには生き方を教えてやるべきだと思った。また日本人の良さも学べ、とも言ってきた。日本人教師の私への態度はマル・バツがハッキリしていた。私はそののち一旦大手の系列会社に入ったが、そこを退職して今は住宅関連事業の会社を自営している。その傍ら、一度は非行を犯した子らのための青少年育成事業（更生事業）をボランティアで続けている。国籍はどうあれ、地域にも親にも見捨てられた子どもたちを引き受ける場所と人が絶対必要と思う。



□聞き書き・Dさん（在日二世・男性）

○一九四六年生まれ。生まれた場所は京都市伏見区だったが、生後、大津市内、舞鶴、また大津市内などを経て、父の仕事の現場である甲賀郡大原村（のち、甲賀町）へ来た。父の故郷は慶尚北道の華北面と聞いている。日本へ来てどうして暮らしていたかは、殆ど聞いていない。三池炭鉱で働いていたことは確からしく、「炭鉱節」が得意だった。戦後、県内最大の土堤ダムとして建設が始まった大原ダムの工事現場で請負師か、手配師のようなことをしていたらしい。私たちはダムの川下の飯場に住んだ。飯場には三〇〇五〇人くらいの朝鮮人だけが暮らしていた、と思う。父は一時、「民戦」の仕事もしていたようだが、新聞が読めず、逆さにして読んでいる振りをしていたこともあった。母は四人の男の子を育ててくれたが、近くの農作業の手伝いなどもしていた。父はスシ米を京都へ売りに行っていたこともあった。

○食糧には困っていた。朝は芋、野菜の切れ端、麦。昼弁当はなし。学用品もロクに持たなかった。私の出生届がなく、後に戸籍を確定するときには困った。たぶん、解放直後のこととて手続きをしていなかったらしい。母はまた近所の農業用水溝の掃除を手伝っていたが、その仕事を断られたこともあった。どういうわけか、魚屋で魚を売ってくれないこともあった。他方、茶の実、葉草、ワラビを茹でたものを町へ売りに行っていた。母は「一日だけでも人間らしく生きたかった」と言って亡くなった。父はどういう意味かわからないが、「警察の世話にだけはなるな」と言い続けていた。子どもの頃、朝鮮人といつて差別されることはなかったが、「ダムの子」と言われ続けた。

○ダム工事の終了後はそこで働いていた朝鮮人はバラバラになり、各地へ新しい仕事を求めて出ていった。私の兄弟たちも農機具関係の末端の仕事、設備屋、車両修理関係、万金などの仕事にたずさわった。母は四人の男の子を一人前に育てあげたことをいつも自慢にしていた。

私は後に朝青同に加わり、やがて朝鮮総聯の専従職員にもなったことがある。どういうわけか、父はそのことに猛反対していた。甲賀地方に戦中・戦後から朝鮮人が多く住んでいたことは子どもの頃は知らなかった。後になって三雲や石部に同胞がいたことを知った。亜炭鉱山で朝鮮人が働いていたことも聞いたことがなかった。農地も飯場とその周辺も自分のものでなく、みんな借り物、借り住まいだったのだろう。県の朝青同の役員になって、かつての出入国管理法改悪反対運動の先頭に立って闘ったことが強い思い出である。

ほかに、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンによる『東九条の語り部たち―十四人の聞き取り報告』（二〇一三年七月刊）に収録された滋賀県で一時生活していたことのある在日のG・Cさんの話がある（文中の篠原とは現在の近江八幡市西部地域）。



○あの頃は日本人も朝鮮人もそれ（闇米を京都へ持込んで売る仕事）で生活してた。安土もな、ようけうちの同胞がおったんや。北鮮<sup>マ</sup>帰った人がようけいはるねん。篠原もな。近江八幡は少ないけど、篠原やら野洲にもおったし、守山にもおった。安土、能登川も多い。河瀬はあんまりない。篠原は同胞が駅前によく住んでました。そういう人らは、もっと田舎から闇米買ってきてな、京都からうちらが買いに行くやん。うちがそれを買ってきて、それをまたおろすやん。

滋賀県の篠原には、そうやって商売して住んだはった同胞が多いよ。近江八幡は同胞だけ違って日本人も朝鮮人もみんなやわ。守山、安土、野洲、能登川とかもそうやった。その辺はな、チェジュサラミ（済州島の人）が多いの。なんでかいうたら、昔、能登川に油をつくる会社かなんかがあったらしいねん。それで戦争時分、徴用なんかで引つ張って来たんちゃうかなって思う。そこに社宅があつて、その社宅の人がみんな京都やら大阪に売り込みに来るやん。ようけあつたわ。チェジュサラミだけ違って、陸地（朝鮮本土）のひとつもようけいはつたわ、能登川にはね。百姓してる人もいたしな。安土にも同胞で百姓してる人いはつたしね。私は運び専門で、二〇年ほどやったよ。うちの息子、買い出しに行ったことはないけど、仕事が休みのときに、出町の方まで運んでくれることあつたよ。駅に迎えにも来てくれてたしね。

私、ブタ箱入ったんは、六、七時間やったと覚えてます。日本の人もいるし、日本の人は田舎から売り込みに来てた。私含めて、七条署の大きな部屋に一〇人くらい入れられたと思うわ。昔は水道局のところ民団（在日本大韓民国民団）があつてね。それで私の兄が、民団の人連れてきてくれて、ほんで出れた。あれいっぺんだけやね。その後は、京都駅で張ってたら、米ほって出るわけ。捕まったらブタ箱放りこまれるから、持って出ない。一回、煙草を持ってきてね、私、煙草も運んでましたんや。あの時、ひっかかったら、ものすごく怖い時ですねん。

### おわりに

滋賀県の西南部を占める湖南・甲賀地域は広大な面積をもつ土地である。その在日コリアンの存在は地元の当事者を別とすると、自治体の担当者でもよく知らないのが現実だろう。しかし、地元で長年人権問題に関わって来たごく一部の人は在日の人びとがある程度の数で存在している、ということは知っていた。だが、いつごろから、どこからか、どうして来るようになったのか、は正確に知られていない。つまり「噂話」程度に終わっていたのが実状であつた。だが、その噂話を手繰っていくと、具体的な実像が見えてきた。本論に引いた朝鮮総聯のAさんの話は

実はあとから聞いたのだが、聞き書きをしたBさんやCさん、Dさんの話や体験を聞くと、Aさんの総括的な話を裏付けるものであった。

大づかみに言うと、一九三〇年代を中心にいくつかの土木、建設関係の工事現場で朝鮮人労働者の姿がみられ、仕事の現場を求めて、この近辺を転々としながら居住していたこと、しかし多くは一九四三〜四五年にかけて西日本各地、とりわけ京阪神地方から「自主疎開」して家族ともども移住してきたケースが多かったことがわかった。また戦後すぐに帰国することができず、そのまま当地に居ついたが、当時の日本人の心ない差別の目線や偏見、「村八分」行為などが相当後までも続いていたこと、同胞同士は仕事や情報の共有を通じて助け合ってきたことが浮かびあがる。さらにその間、自主的に生まれてきた民族学校や民族学級が同胞たちの自尊心を高め、子どもたちに生きる自信を培ってきたことも忘れてはならない。一九六〇年以降の高度成長期以後、この人々の生活条件はかなり改善されてきた。しかしその条件は、日夜刻苦勉勵してきたこの人々の努力により結実してきたのである。この世代の人達、すなわち初期の在日二世は七〇歳代の半ばに達しようとしている。この人たちの体験を地域史の中に位置づけることが早急に必要であろう。

## 附

(表9) 及び (表10) は一九四八年以後の甲賀郡の市町村別外国人登録人口の推移である。表により、資料出所が異なるので、必ずしも正確な数とはいえないが、その概略を知ることができる。これによると、一九六〇年代の朝鮮民主主義人民共和国への「帰国運動」があったことは聞き取り調査でも語られたが、総数としてはそれほど多数ではなかったことがわかる。一九七四年以降は登録人口が再び増加に転じている原因は不明である。就業場所が経済成長の延長下で増加したものかも知れない。参考までに二〇一二年末のブラジル人とペルー人の合計数は湖南省で一五一一人、甲賀市で一四二一人であり、在日コリアン人口のいずれも約三倍に達している。これらの南米からの日系外国人労働者とその家族は湖南省に所在する製造業などの工業団地で働いている人たちであるが、聞き取りをした方々の話によれば、それらの工業団地で働いている在日コリアンの人はほとんどいない、とのことである。従って(表9)、(表10)にみるように、一九九〇年以降も、この地域で在日人口は減少することはあっても増加はしていない。

(表9) 戦後の湖南・甲賀地域の在日コリアン人口推移 (1)

甲賀郡外国人 登録数	甲賀郡 合計	朝鮮・韓国入登録者数																																
		石部町	三雲村	岩根村	下田村	伴谷村	柏木村	水口町	貴生川町	大野村	土山町	鮎河村	山内村	佐山村	大原村	油口村	甲南町	雲井村	信楽町	朝宮村	小原村	多羅尾村												
1948.12	1164	1164																																
1949.12	1172	1172																																
1950.12	1128	1127																																
1951.12	1062	1059																																
1952.12	1064	1064																																
1954.12	1126	1125																																
1955.03	1174	1174																																
1955.12	1170	1170	247	140	140	2																												
1957.03	1202	1201	287	143	143	—																												
1958.03	1176	1175	276	134	134	—																												
1959.03	1194	1193	281	143	143																													
1960.03	1179	1178	292	131	131																													
1960.12	1148	1147	289	137	137																													
1961.12	1143	1140	279	135	135																													
1962.12	1090	1087	299	148	148																													
1963.12	1059	1058	297	165	165																													
1964.12	1032	1027	280	160	160																													
1965.12	1027	1019	292	151	151																													
1966.12	1024	1016	286	161	161																													
1967.12	1019	1011	288	174	174																													
1969.01	1014	1003	291	174	174																													
1970.01	1008	1000	285	163	163																													
1971.01	961	957	258	156	156																													
1972.01	1007	999	269	161	161																													
1973.03	1012	998	254	170	170																													
1974.03	1037	1022	254	189	189																													
1975.03	1130	1112	280	227	227																													
1976.03	1152	1123	286	219	219																													
1977.03	1138	1105	267	215	215																													
1978.03	1133	1096	263	232	232																													
1979.03	1163	1128	273	232	232																													
1980.03	1169	1141	281	273	273																													
1981.03	1149	1123	275	271	271																													
1982.03	1129	1098	276	270	270																													
1983.03	1153	1120	283	286	286																													
1984.03	1169	1135	282	292	292																													
1985.03	1177	1138	277	308	308																													
1986.03	1173	1120																																
1987.03	1172	1113	269	306	306																													
1988.03	1172	1107	268	315	315																													
1989.12	1189	1110	272	329	329																													
1989.12	1260	1120	276	337	337																													

※資料：観光労働部観光交流局国際課調べより。(日)甲賀郡地域) ※の数々は朝鮮・韓国入以外の外国人を含む。年月日は1969年は1月1日、それ以外は各月31日。

(表 10) 戦後の湖南・甲賀地域在住コリアンの人口推移 (2)

年次	石部	甲西	水口	土山	甲賀	甲南	信楽	合計
1988	272	329	283	118	39	27	52	1120
1989	276	337	290	109	34	25	49	1120
1990	279	336	290	102	23	35	45	1110
1991	254	348	303	94	33	33	44	1109
1992	240	353	312	90	34	34	49	1112
1993	236	357	315	85	32	32	41	1098
1994	229	362	318	80	31	44	37	1101
1995	207	365	312	78	31	40	36	1169
1996	196	369	315	81	28	40	31	1060
1997	191	365	305	83	30	42	33	1049
1998	178	360	298	75	29	45	32	1017
1999	177	358	279	68	34	40	34	990
2000	166	359	292	61	29	43	33	977
2001	159	350	281	55	28	41	31	945
2002	156	331	270	43	25	38	35	898
2003	147	318	265	43	25	33	32	863
2004		454					370	824
2005		429					340	769
2006		427					342	769
2007		398					339	737
2008		388					328	716
2009		366					316	682
2010		361					310	571
2011		294					294	653
2012		292					292	636

※引用文中、差別的表現とみられる箇所も資料上の正確さを失わないために、そのままとした。

注) 湖南市 = 旧石部町、甲西町、甲賀市 = 旧水口町、甲賀町、土山町、甲南町、信楽町

備考) 滋賀県観光労働部観光交流局国際課調より加工 (毎年末調査)。外国人登録人口および住民基本台帳人口登録者数。

注

(1) 先行研究としては滋賀県立大学・大学院生であった稲継靖之氏の「戦前期の滋賀県における朝鮮人」(二〇〇五年)をはじめとする諸論文や大津市在住の清水義昭氏の現地調査、そして滋賀県立大学の河かおる氏の「滋賀県における朝鮮人強制動員の記録」(『滋賀県立大人間科学部研究紀要』所載)などがある。特に本論では稲継氏の研究に負うところが多く、同氏が作成した人口統計表などはそのまま引用させて頂いている。(注の2、3、4も同様)また河かおる氏の論文では「滋賀強制動員被害調査結果現況」の一覧表を紹介しておられる

が、その中では次のような具体的な作業場名があげられている。滋賀航空隊、大津航空隊、第九八部隊（中部第八航空教育隊）、中部第三七部隊、一二五五三部隊、農耕勤務隊、歩兵七八聯隊補充隊、四一九部隊、八日市部隊、堅田所在工場、岡崎産業、日室鋳業土倉鋳業所、住友金属伸銅所、小野田セメント彦根工場、滋賀航空隊工事場、逢坂トンネル工事場、甲賀郡所在炭鉱、大津所在工場、八日市所在飛行場（右記現場での被害者、生存者の合計動員数は一〇八名と計算されている）。

(2) 『大阪朝日 滋賀』一九三〇年七月二二日の記事。

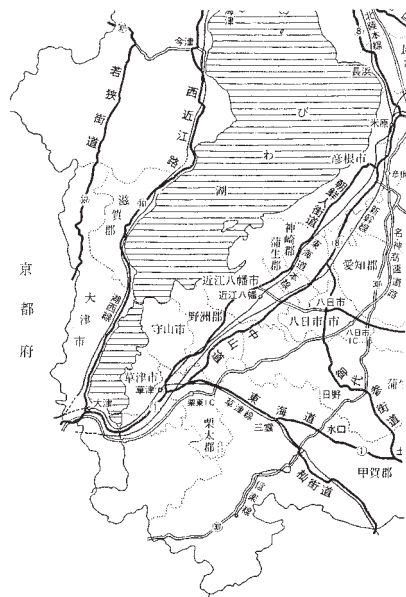
(3) 『大阪朝日 京附』一九二四年六月一八日の記事（大津職業紹介所主任談・青柳主任書記の談話）。

(4) 中央協和会「昭和十八年（一九四三）三月現在 協和事業機構調」より

	指導員数	補導員数	正会員	準会員	在住男子	在住女子
大津支会	一四	四一	九七一	一七二〇	一四三六	一二五五
水口支会	七	一〇	二七一	五六九	四八二	三六一
信楽支会	七	七	二〇八	三八三	三三〇	二六一
県内合計	一六四	二二五	三五二二	六八一九	五八〇三	四五四七

（指導員とは朝鮮人で協和会事業に協力的な者、すなわち「皇民化」政策に協力的な者を特に選んで会の事業に協力させた人びとである。補導員との違いは不明）

(5) 河かおる「滋賀県における強制動員の記録」、および塚崎昌之「一九四五年度の日本への朝鮮人強制連行」（『季刊戦争責任』五五号、二〇〇七年）ほか。雨宮剛『もうひとつの強制連行』謎の農耕勤務隊〜足元からの検証（二〇一二年、自費出版）。この書には滋賀県瀬田町（現大津市瀬田地域）と長浜市周辺の農耕隊の存在が述べられている。このほか塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度の実態〜武器を与えられなかった『兵士』たち」（『在日朝鮮人史研究』第三四号）



「関係地域略図」